

# 妙たえの光ひかり

通刊28号 復刊3号

1991年10月22日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡巻町  
角田浜

〒953 ☎0256-77-2025



## イチチョウの大木

本堂の正面脇に枝を大きく伸ばしてスックと立つイチチョウの大木。高さ約二十メートル、直径九十センチ。樹齢は不詳。冬枯れの枝、他の木よりも遅い新緑の姿もいいが、なんと言っても秋晴れの澄んだ青空を背に、黄色く色づいた葉をまとった姿が一番美しい。

もともと中国が原産地で、日本には古く渡来し、早くから神社仏閣に植えられてきたという。大変に長命の樹で、全国各地で天然記念物に指定されるものも多く、そのくらいになると、高さ三十メートル、直径二メートルに及ぶとか。

イチチョウと言えばギンナン。妙光寺のイチチョウもほぼ隔年で多くの実をつける。これを小袋に入れて大晦の夜、除夜の鐘を撞き集った人達に分けている。袋には百八までの鐘の数が書いてあって、撞いた順に持っていくしくみ。いつも百八袋では足りないが、百八と書いた袋を数多く用意してあるので心配無用。

# ほとける心

小川英爾

森トメさんは七十七歳の今も元気に畑仕事に精を出し、雨が降ればベストセラーの新刊書を次々と読むかくしゃくたる毎日。興味引かれる本が出れば、町の本屋まで五キロの道のりを自転車で行く。亡き夫の軍人恩給もあってお金に不自由なく、生来口も利き手先も器用、男まさりの性格で、夫なき後苦勞して守ってきたこの家は、まだまだ自分がまもらなければという気概にたけていた。それが災いで、同居している後を譲った息子夫婦と衝突することもしばしば、さらに同じく同居する孫夫婦まで巻き込んで、三者三様しっくりいかない毎日が続いた。

そこまで至るにも、トメさんのこれまでの苦勞を考えれば理解出来るというもの。元々農家の生まれで、幼い頃から家の手伝いを当然として育ち、十三歳からは紡績工場で一生懸命働いて高い給料を貰い、請われて大きな町の裕福な家に嫁いだ。しかしそこには縁が無く男の子一人残して離婚、実家に戻り、改めて現在の森家に再婚同士として嫁いだ。その夫には死別した先妻との間に二人の男の子があり、トメさんとの間にも娘が一人生まれた。しかし間もなく夫は出征して戦死、二人の結婚生活は三年にも満たなかった。それからというもの子供と義父母を抱え、男と対等に仕事をこなして、戦後の混乱期からこれまでを必死になって乗り切ってきたのである。

曾孫も成長して一家六人、揃って農業に打ち込んできたが、昔の苦勞にこだわるトメさんと時代の流れを主張して譲らない息子夫婦、それに経験の浅い孫夫婦、それぞれの歯車がかみ合わず家の中の対立が生じた。思いあまって孫のお嫁さんが、明るい家庭になることを七面様に祈る日々が続いたという。

その願いも届かなかったか、孫夫婦は子供への影響を心配して揃って家を出た。

そんなある日、例によってトメさん、自転車で外出のおり走ってきた自動車に接触、骨折で入院する騒ぎとなった。命に別状ないもののこの年令の骨折は治りにくく、息子と孫のお嫁さん、それに近所に嫁いでいる娘が交代で一生懸命看病に当たった。トメさん「これまで他人の世話にならなくとも生きて行けると思ってきたが、ケガをして皆にこんなによく面倒をみてもらいたい。この歳になって頑固に自分一人で生きては行けず、助けてもらいこれまでの苦勞にこだわっていた自分はずかしいようだ」と思うようになった。以来退院してから、お互い思いやりのある家庭になった。近所でも「近頃のトメさん、仏様のように優しい顔になった」と評判になるほど。同じ頃、孫夫婦も子供の「友達がいる前の家がいい」との意見を機に戻って来た。

高齢化社会まっしぐらの現代日本、老後を迎える心構え、老後の過ごし方がよく問われる。京都大学のある教授は、「その人の心の持ち方で老後はずいぶん違う。一般にボケ易い人は若い頃から頑固で感情的、こだわりを持って地位や財産に執着する。一方頭の衰えない人は、明るく親しみやすく、世話好きで親切。そのためにはほとける人間を目標せ」と言われた。ほとける人間とは、心をほどこぎ、物事にクヨクヨととらわれないこと。

仏様の仏とは、ほどこげるからほとけるになったのが語源とも言われ、私達の心を縛る煩惱、つまり欲望や執着心から自らの心を解きほどこぎ、気持ちを楽にした状態と説かれている。成仏とは、死によって生きているあいだのさまざまな執着から解放されて仏に成るといふよりも、生きながらにして仏の心に至ることを本義とするものであらう。

## 受付係二十余年

高橋 強・キシ夫妻

妙光寺の祭礼のたびに、帳場で受付係を勤めているのが西川町升潟の高橋強さん（75歳）。お彼岸やお盆等年五回、最近加った巻町の石田大吉さんと共に、当日は朝の幕張りから始めて、受付、案内、後片づけと夕方まで忙しい。

この高橋強さん、昭和十三年に父親が亡くなって長兄が家の後を継いだ、元来体が弱くて家業の農業が勤まらず、次男で継ぐことになったのが二十五歳のとき。以来農業に専念するが、兵隊に出たり、経済的に苦しいときに家の建て替えの必要に迫られるなど、苦勞の連続であったという。そんな中、母親ゆずりの七面様信仰を欠かさず、

これまで七面山登詣十二回、身延山へは毎年のように参拝してその回数不明。七面山へはあと一回登りたいと言う。

家を継ぐと同時に升潟地区の妙光寺世話人となり、寺と地区の檀家との熱心なパイプ役を勤めてきた。帳場受付係は、前任者の故内藤作太郎さんに「今度はあんたの番だ」と渡されて、以来二十年余りになる。

同じ頃、お盆前の墓地掃除の大変な様子を見て、その役を買って出て以来二十年間、夫人のキシさん（72歳）と共に、升潟地区の人達の応援を得てそれを担当してきた。事前の除草剤散布、枝払い、そして暑い中で藪蚊、蛇、蜂

の巣に悩まされながらの作業は大変なもの。二人の力なくしてはこれまで到底やってこれなかった。

今は三人の孫を含む七人家族の幸せな毎日。毎月一回のお講が楽しみの一つと言う。土曜の夜、升潟地区現在七軒の檀家が当番の家に集合、お経の後、お茶とお菓子でよもやま話に花が咲き、解散するのが十二時近いこともしばしば。このお講、強さんが言い出して始まり、もう五十年続いている。



## 山の墓地の移転を計画しています

墓地となっている山の崩落の進行が

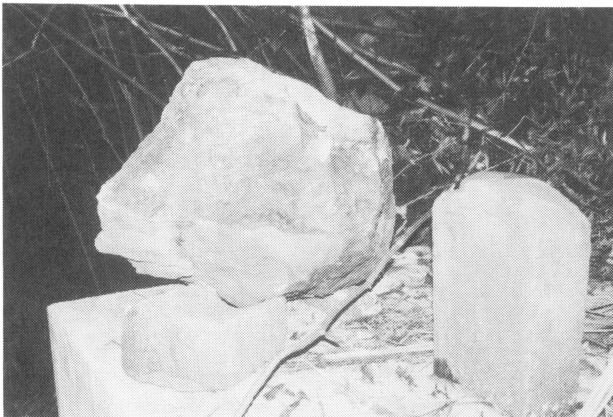
このところ著しく、一部には危険な箇所も出ています。題目堂に近い歴代住職の墓で山側の三基が、今年の春先土砂崩れで埋まりましたし、写真のように落石で墓石が壊されるといいうのも何件か起きています。三段目くらいから上の墓は、お年寄りにはお参りできない現状もご承知の通りです。

その対策として以前から平地の畑のところを墓地として造成、新規建立の方、改修の方にはそちらの利用をお願いしてきました。同時にお参りする方のない、いわゆる無縁墓の調査も進めてきました。ここに至ってはいよいよ落石等の危険が増大してきたこと、墓地掃除等の管理が山地で困難になってきたことにより、本格的な移転の必要に

迫まられています。

しかし、「新しい墓地にはりっぱな墓ばかりで古い墓石は移しにくい」という声があること、あるいは移転にもなう経費の問題、そして無縁墓の扱いの問題等いくつかの課題があります。さりとてこの問題を放置する訳にもいきませんので、取り敢えず対象となる墓を全て調査、個々に相談するという方策を検討中です。詳細決定はその後になります。いづれ協同による集団移転が経費的に一番良い方法と思われると思います。その際にご協力をお願いいたします。

護持会々報でお知らせしました通り、客殿の床下が換気不足で腐って、床が抜けるという状態のため、一旦床をはがして、下にコンクリートを打つ作業



にかかります。期間は十月二十三日から約一カ月。費用の五百万円は銀行借り入れで、護持会から毎年返済するという計画です。

工事期間中客殿の全ての部屋が使用不能になりますのでご承知おき下さい。

## なごやかにフェスティバル安穩

去る八月二十四・五日、第二回フェスティバル安穩が催されました。泊ま

りがけで地元はじめ関東各地、名古屋、大阪、神戸から三十名の方が、懇親会には六十名、講演と法要には百名以上の方が参加、終始なごやかな会となりました。前日から当日の朝まで、NHKラジオが関東甲信越地区で告知放送したこともあって、埼玉県から飛び入り参加の方もありました。

講演と座談は井上治代さんの司会で、樋口恵子さん、小林ぎん子さんと小川住職で、目前の高齢化社会の迎え方を、参加者も交じえて語り合いました。法要では台風の余波で風が強く、千本ローソクが消えるハプニングの中、雅楽、読経、稚児の出席で荘厳に営まれました。懇親会は全て手作り料理で

和やかに、宿舎の温泉旅館では朝まで語り明かした方もあったそうです。

翌日の茶話会は皆さん車座になって、戒名から葬儀の心配、はては宗教界批判まで、話が盛り上がりました。来年はこれをテーマにしようかと思っております。天気も回復して岩屋での雅楽の調べ、自然と一体化した幽玄な雰囲気は感動的でした。

都合で参加できず残念というお手紙、ローソクの献灯、たくさんありがとうございます。御礼申し上げます。

月影もなき闇の夜を

導きて安穩廟の灯ゆらぐ

初秋の風渡る中安穩の

法要の灯りもえ盛りつゝ

(小島 静)

平成元年八月に開設した安穩廟百八

区画、お申し込みが百件を越しました。今夏も読売新聞、日本経済新聞に全国掲載され、問い合わせも続いていますので、第二基建設を考えなければいけないのですが、あまりにも急進行でしたのでとまどっております。運営上は数の多い方が望ましいのですが、一方でお一人お一人とのお縁を大切にしていきたいと考えているものですから。



## 寺庭から

# 救いの手



今年は何年になく夏から秋にかけて多忙だった。もう三ヶ月も休日らしいのをとっていない。これはもうお寺の宿命というか、最近ではあきらめているのだけれど、疲れてくるとちょっと辛い。

お寺を住家にする人を「寺族」その生活の場を「寺庭」という。はじめは抵抗があったけれど、今は少し慣れた。「年中無休、二十四時間営業です」まるでやりのコンビニストアーみたいだ。それを住職とその家族で（もっとも四人の子供は役立たず）きりもりしているのだから大変だ。そして行事の

前など、とうていこの人数では無理と心配していると、不思議なことに、どこからか救いの手がのびるのである。その方々の手伝いで準備が整ってゆく。さて行事も無事終わり、住職とお茶など飲みながら「仏様のご加護だね」などと話し合う。私は口が裂けても言わないが、後には必ず、「日頃の精進が良いからだ」と自分のことを言うのは住職である。

秋のお彼岸に初めて割前地区の姑さんに代わって若いお嫁さんがお手伝いに来てくださった。安穩でお馴染みの、角田の若手の方々に続いて、こうやっ

てお寺に若い人が集まって下さるのは本当に心から嬉しい。ありがとうございます。

お寺での働きは本当の意味でボランティアである。お寺に奉仕することは、仏様に奉仕することだ。私はそんな皆さんにつくづく頭がさがる。そしていろいろな事を学ばせていただく。またそんな熱心な人材をもつ妙光寺を誇りに思ったりする。行事の時、お寺の台所では、働きの人たちが心をこめて料理を作る。私はその方々に心の中で手をあわせてしまう。寺庭もまた良いのかもしれない。

（小川なぎさ）

## 行事案内

本号の発行時には終っているかも知れませんが

十月二十二日(火)

お会式(おえしき)

午前11時 お会法要

昼 12時 おとき

午後1時 法話

日蓮聖人七百十回忌の法要です。法話に大本山池上本門寺布教部執事、市川智康師がおいで下さいます。おときの準備の都合上、参加御希望の方は事前に電話して下さい。

お会式の案内状にも書きましたが、曾根線のバスが廃止、巻線のバスも一部減便になり参拝の足が大変不便になりました。そこで試験的にこのたび貸切バスを運行します。詳しくはお会式の案内状にありますので覧下さい。利

用者が多く、経費的に大きな問題がなければ今後他の参拝日にも計画します。

十二月中

### お札配り

例年の通り、月忌納めと来年のお札配りのお経に住職が全檀家を回ります。日が短い上に正月の準備があり、さらにこの時期葬式の多いこともあって、一人で二百軒以上回るものですから予定が立てられません。昨年は母の入院騒ぎも重なって回わりきれない地区もありました。ご理解願います。

### 台風十九号の被害

九月二十八日の台風十九号で、風による被害が各地でありました。妙光寺ではクヌギの原木が根から倒れ、杉が五、六本まきぞえになりましたが、幸いすぐ脇の鐘楼堂は無事でした。倒れたクヌギの木は製材してベンチを作ろうと思います。

### あとがき

九月発行予定が遅れてようやく第三号です。「楽しみにしている」と言われて嬉んだら「中でも奥さんの「寺庭から」がいいネ」と続き、私としてはアハハハと答えた? 次第。次号は十二月発行予定ですが、十二月は忙しいので来月にはもう準備を始めないとまた遅れます。不十分な内容ですが、努力を買って下さい。

第二号の表しのムササビ君の写真がテレビ局のカメラマンの目に止まり、撮影したいとのお話。先日夕方一緒に下見したら、六頭が交互に思わず頭を下げる程の頭上を飛んで、久し振りにワクワクする興奮でした。(小川)

